

18 禁



# 体験版



魔術師の手と少女の肢体

タケチャン大佐



最近、寮のテレビが新しくなった。日本でも地デジ化と言ってアメリカと同じように地上デジタル放送に切り替わったのだと言う。僕は日本のテレビ番組ってあんまり知らないからケーブルテレビでアメリカの番組にチャンネルを回している。下の日本語の字幕はちよつと気になるけれどもね。

子供向け番組？ まさか。毎日チェックしているのは手品の番組だよ。何たって僕もプロだからね。

舞台上で魅せるタイプの僕は逆にテーブルマジックを得意とする人を尊敬する。凄いなあと思いつつも映像越しにトリックを見破ろうと手元を確認し勉強している。一部のトリックは見破ったり実際僕自身が再現したりも出来るけれどプロのマジシャンの手さばきには本当に感心する。

どうやったらあんなに器用な指使いが出来るんだろう、とか、どんな練習をしているのだろう、とか……。

でも最近、それとは別に不思議な感情が沸くようになった。

何故だか僕は、いつしかあの手に身体を触られたと思うようになってしまった。

あの遅しくて、それでいて器用に動くあの手に頭を撫でられたい、いや、頭だけじゃなくて、身体全体、特に脚とか……。

『それでは皆さん、このカードの柄を覚えてくださいね』

あのバリトンボイスを耳元で囁かれたら、身体が熱くなっちゃいそうだ。

そうだ、最近なんだか身体が火照るような気持ちになる事が多い。

別に風邪を引いている訳でもないのに、最近の僕はなんだか変だ。

「んっ……」

股の前あたりが、きゅん、とする。むず痒いと言うか、もどかしいと言うか……。

駄目だ、変な事考えちゃう。慌ててテレビを消した僕はベッドの上に寝そべり別の事を考えようとする。でも……。

『さあドロシーちゃん、身体を委ねてご覧……』

『そうだいい子だ。綺麗な脚だね、もっと触らせて……』

『そうだもっと素直になるんだ、3つ数えたら君はもっと淫乱になる。1, 2, 3, ……』

マジシャンの手とバリトンボイスから想像されるのは、なんだかともいけないう妄想。テレビを消しても、あの手と声が頭から離れない……。

「んっく……」

短めのズボンの上から、手を押し当てる。なんだか、いけないことをしてる気がするけれど、それでもこのウズウズした感じを収めないと夜も眠れない。

「んっ、ああ……」

僕自身も信じられないくらい、甘い声が漏れる。息遣いも荒い。どうしてこんな声が出るんだろう。

「あ、駄目……」

必死で股を押さえ、むず痒さを必死に収めようとしてもどんどん気持ちが高ぶってくる。心臓もバクバク言い出した。

「あっ!?!」

ズボンの上からじゃどうしても我慢できなくて、もうズボンのファスナーを降ろし、パンツの上から指で股のあたりを弄る。

「こ、こんなの、駄目なのに……」

何だか解らないけれど、とつてもいけない事をしているみたいで胸がドキドキする。こんな事しちゃいけないのに、でも、指が止まらないよお……。

「ん、ん、あんっ!」